

明刻清康熙間重修本『綴白裘合選』初探

——『綴白裘』の成書と轉變——

根ヶ山 徹

一 諸論

明代嘉靖年間における南戲の復興後、萬曆年間に至って戯曲の制作は爛熟期を迎え、夥多オホシタの作者が登場し作品も氾濫した。その受容の形態は階層によって様々であったろうけれども、挿圖や音注などが施された版本が数多く存することから、讀書人層にあつては舞臺における上演だけではなく、脚本を手にとっての所謂讀曲という手段によつても鑒賞したであらうことは想像に難くない。

こうした受容形態を承けて、戯曲の散齣や散套のみを輯めた選本が編まれたことは周知のごとくである。明末から清初にかけて上梓された夥しい數の戯曲の選本には、當時、讀書人を對象として隆盛を誇つた崑山腔のみならず、例えば民衆を對象とする徽調や弋陽腔系の聲腔など地方で行われていた

演劇が寫定されたものも少なくない。

さて戯曲の選本のなかで最も大部で、後代にまで版を重ねたものは、清中葉の乾隆二十九年（一七六四）から同三十九年（一七七四）の間に上梓された『綴白裘』十二篇（以下「通行本」と略稱）であろう。「通行本」については李克明「綴白裘新集序」に「玩花主人 編む所の『綴白裘』、…乾隆癸未（一七八年・一七六三）の夏、錢子沛思、繁を刪り漏を補ひ、其の舊に循ひ復た其の新を綴り、當世の音を知る者に證あかしらかにせんと欲する有り」、程大衡「綴白裘合集序」に「玩花主人 向に『綴白裘』を集め、錢子德蒼 搜探し復た増輯す」、また李宸「綴白裘一集序」に「玩花主人『綴白裘』を編み、已往の傳奇を集彙して、世人の心目を悦ばしむ」と言うところから、玩花主人が編んだ祖本に錢德蒼が補綴を施して成立したものと考えられてきた。

ところが、北京大學、及び北京圖書館には明刻清康熙間重修の『綴白裘合選』（以下「合選」と略稱）なる書物が架蔵されておられ、「通行本」の成立、ひいては『綴白裘』と銘打つ選本の轉變が、必ずしも上掲序文の記述のごとく單純ではないことが推測される。從來、『合選』に關しては、孫楷第、傅惜華、周妙中、吳新雷の諸氏によつて著録、あるいは紹介されてきたもの（1）、いづれも引用、概述の域にとどまり、明末の他の戯曲選本との關係、また『綴白裘』なる選本轉變の過程における位置については明確にされていない（2）。

そこで本稿は、明末における戯曲選本の上梓、とりわけ戯曲脚本の分化という觀點から『合選』の概要と特徴について報告し、同時に『綴白裘』の轉變についても明らかにしようとするものである。

二 「綴白裘合選」

『新鐫綴白裘合選』四卷は北京大學圖書館古籍善本室に馬氏特蔵本（3）として四卷本、及び卷一の殘闕が收蔵され、北京圖書館善本特蔵部にも卷四の一部が架蔵されている。

封面右には「鬱岡樵隱／積金山人全輯」と雙行に記して、その下に「翼聖堂梓行」とあり、中央には大字で「綴白裘合選」と刻す。楊繩信氏編著『中國版刻綜録』によれば、翼聖堂は金陵の書肆であることが明らかである（4）。更に左には

「詞林拔粹」なる遊印が刻されて該書が醒齋の編んだ『白裘』なる書物に濫觴し、數次の改訂を経て上梓されたものであることを言明する識語が添えられている（5）。

『白裘』の一書、おぼめ醒齋よりし、厥の後再に至り三に至り、別に至り廣に至る。何ぞあ管だに汗牛充棟のみならんや。但、諸の選を購ひて玩賞する者、篇帙の浩煩なるに苦しむ。本坊あぐく爾先生に請ひ、博く歌林に採りて、詳訂すること數四。

次いで、「時康熙歲次戊辰（二十七年・一六八八）華陽山人漫題」と署する「綴白裘合選叙」が附されている（6）。華陽山人が如何なる人物かは詳らかにし得ない。

冒頭には該書は六十種の戯曲を輯録すると言明し、書名命名の由來にも觸れる。

山人 六十種の絶妙を選びて以て書を成す。猶ほ千狐の腋を採りて以て裘を成す者なり。

續いて戯曲史を概述した後、該書の内容、編纂の意圖について述べている。

茲の集は興會の及ぶ所、辭に因りて義を審らかにし、義に因りて情を審かにす。下里に呻吟せし逸士の作多く、金閨に歎詠せし思婦の情切なり。鏡騎の鼓吹、巷閭の童謠は、其の蘊藉を舒べ、其の悃悵を導くに非ざるは無し。山人精華を咀くひて糟粕を吐き、陳腐を去りて新穎に

更め、彙めて以て書を成す。

敘文に次いで目錄が列記され、以下、本文へと続く。各巻首題は「新錦綴白裘合選卷〇」、巻二本文首には「秦淮舟子審音／鬱岡樵隱輯古／積金山人採新」と記す。秦淮舟子、鬱岡樵隱、積金山人については明らかでない。半葉十行行二十字（白は雙行）、眉欄に校語を記す。明刻部分の版框は十四・二×二十一・五cm（眉欄二・九cmを含む）、清重修部分は十三・六×二〇・四cm（眉欄一・九cmを含む）。單邊有界、無魚尾。版心題「綴白裘合選 〇巻×」として巻數〇、葉數×を示す。尙、該書に輯録される散齋は以下の三十九種八十七齋であり、敘文の言説からすれば現存する四巻本はあるいは完本ではないかとも思われる。

巻一 「琵琶記」「伯喈慶壽」「蔡公逼試」「南浦囑別」「臨粧感嘆」「琴訴荷池」「中秋望月」「西廂記」（目録題「北西廂記」）「佛殿奇逢」「琴心挑引」「錦字傳情」「月下佳期」「荆釵記」「荆釵成聘」「誤報訃音」「十朋祭江」「拷問梅香」「白兔記」「新婚遊賞」「獵回詢父」「草廬記」「怒走范陽」「尋親記」「逆旅逢親」「金釧記」「鬪艸遺釧」（目録題「鬪草遺釧」）、「四德記」「捷報三元」「伍倫記」「打牛被擄」

巻二 「幽閨記」「兵火違離」「兄妹避難」「途中邂逅」「幽懷密訴」「香囊記」「郵亭寄宿」「綵樓記」（目録題「探樓記」）「破審分袂」「金印記」「蘇秦自嘆」（目録題「懸梁刺

股）」「周氏燒香」「四喜記」「禁苑呼名」「四節記」「攜妓遊江」「攜妓東山」「泛舟赤壁」「驛女掃亭」「浣沙記」「范蠡遊春」「蠶迎西施」（目録題「郊迎西施」）「西施採蓮」「西施憶鄉」「范蠡扁舟」「連環記」「花亭賞春」「月下投機」「計就連環」「千金記」「楚營夜飲」「戴月追賢」

巻三 「南西廂記」「佛殿奇逢」「隔牆酌和」（目録題「隔牆酌和」）「遣婢請生」「臨期反約」「玉簪記」「談經聽月」「絃裡傳情」「詞妬鸞鳳」「姑阻佳期」「綉襦記」（目録題「繡襦記」）「墮計銷魂」「襦護郎寒」「別日勸學」「玉玦記」「黥盡賣身」「春蕪記」「園中邂逅」「玉環記」「玉簫寄眞」「兩世姻緣」「金丸記」「盒隱潛龍」「搜求粧盒」「紅蕖記」「垂釣關情」（目録未標記）

巻四 「紅拂記」「仗策渡江」「俠女私奔」「同調相憐」「玉合記」「邂逅章臺」「綠綺記」「月下聽琴」「紫釵記」「墮釵燈影」「淚燭裁詩」「題紅記」「霜紅寫怨」「金水還題」「溪口收春」「灌園記」「君后授衣」「復位」（目録未標記）、「投筆記」「投筆覓封」（目録題「投筆覓封」）「金錢問卜」「夷邦酌月」（目録題「夷邦酌月」）、「竊符記」「祝賢公子」「究問兵符」「祝髮記」「達磨點化」「青衫記」「坐濕青衫」「還帶記」「綠野優游」「彩毫記」「明皇賞花」「紅梨記」（目録、本文題「紅梨花記」）「再訪」（目録題作「再訪素秋」）、「明珠記」「月下窺花」（目録題「窻下窺花」）「驛館藏書」「明珠重

合]

『合選』は以上の敍五葉、目録七葉、卷一全六十葉、卷二全六十葉（第二十六葉版心は二十六至二十九に作る）、卷三全五十七葉（第八葉版心は八至十二に作る）、卷四全七十葉の計二五九葉から成る。このうち康熙年間の重修に係る部分は、封面、敍、目録、本文卷一第一至二葉（『琵琶記』『伯喈慶壽』の冒頭二葉、卷四第八葉（『玉合記』『邂逅章臺』の途中一葉）・十五葉（『紫釵記』『墮釵燈影』の末尾、及び『淚燭裁詩』の冒頭一葉）・二十八至三十葉（『灌園記』『君后授衣』の後半、及び『復位』の冒頭三葉）・三十二葉（同）『復位』の途中一葉）・五十八至六十一葉（『紅梨記』『再訪』の冒頭四葉）・六十八葉（『明珠記』『明珠重合』の途中一葉）・七十葉（同末尾一葉）の計二十七葉である。これら本文に修補が施されている箇所には重修に際しての増改の痕は認められず、全て原刻の面目を保つべく缺葉部分が忠實に補われているのである。

また輯録された戯曲の時代は、古くは『北西廂記』『琵琶記』から、『玉簪記』『綉襦記』『紅拂記』『紫釵記』『彩毫記』といった萬曆期の作品までである。加えて敍文中に「（有）明の隆慶・萬曆年間」を意味する「有明隆萬之間」なる語句が見えることから、該書は早くとも萬曆年間以降に上梓され、康熙年間に修補されたものと考えられる。

因に『金釧記』『四節記』『綠綺記』は既に佚して傳わらず、とりわけ『綠綺記』は『合選』によってのみ見られるものである。

三 「綴白菱合選」の系統

明代戯曲脚本は上演地域、受容者階層、聲腔の差異によって、内容を異にすることは周知のごとくであり、これらの散齣や散套を輯めた戯曲選本も同様であることは言を俟たない。そのうち『合選』（略號〔合〕）同様に明末、とりわけ萬曆以降に上梓され、かつ同じ散齣を収めるものには、管見の及んだ限り次のものがある（〔 〕は略號）⁸⁾。

〈第一羣〉

・ 梯月主人編輯・隱之道民校點『吳歛萃雅』、萬曆四十四年（一六一六）周之標刻本。〔吳〕

・ 許字校點『詞林逸響』、天啓三年（一六一三）萃錦堂刻本。〔逸〕

・ 冲和居士選『怡春錦』、崇禎間刻本。〔怡〕

・ 冲和居士選『纏頭百練二集』、崇禎三年（一六三〇）刻本。〔纏〕

・ 即空觀主人（凌濛初）評訂・椒雨齋主人點參『南音三籟』、明末刻康熙增訂本。〔籟〕

〈第二羣〉

・凌虛子輯『月露音』、萬曆間刻本。〔明〕

・闕名輯『賽徵歌集』、萬曆間刻本。〔賽〕

・洞庭蕭士選輯・湖南主人校點『樂府南音』、萬曆間刻本。〔音〕

・止雲居士選輯・白雲山人校點『萬壑清音』、天啓四年（一六二四）刻本。〔壑〕

・宛瑜子手定『珊瑚集』、明末周之標刻本。〔珊〕

・鋤蘭忍人選輯・媚花香史批評『玄雪譜』、明末刻本。〔玄〕

・方來館主人點較『萬錦清音』、明末刻本。〔錦〕

・玉茗堂主人（湯顯祖）點輯『萬錦嬌麗』、明末刻本。〔嬌〕

〈第三羣〉

・劉君錫輯『樂府菁華』、萬曆二十八年（一六〇〇）書林三槐堂王會雲刻本。〔菁〕

・八景居士選輯『玉谷新簧』、萬曆三十八年（一六一〇）書林劉次泉刻本。〔簧〕

・龔正我選輯『摘錦奇音』、萬曆三十九年（一六一一）書林敦睦堂張三懷刻本。〔摘〕

・黃文華選輯・郝綉甫全輯『詞林一枝』、萬曆間閩建書林葉志元刻本。〔詞〕

・黃文華精選『八能奏錦』、萬曆間書林愛日堂蔡正河刻本。〔八〕

・程萬里選・朱鼎臣集『大明春』、萬曆間閩建書林金魁刻本。〔八〕

〈第四羣〉

・黃文華選輯『玉樹英』、萬曆二十七年（一五九九）書林余紹崖刻本。〔玉〕

・秦淮墨客選輯『樂府紅珊』、萬曆三十年（一六〇二）唐振吾刻、嘉慶五年（一八〇〇）新鐫本。〔紅〕

・殷啓聖彙輯『堯天樂』、萬曆間閩建書林態稔寶刻本。〔堯〕

・熊稔寶彙輯『徽池雅調』、萬曆間潭水燕石居主人刻本。〔雅〕

・黃儒卿彙選『時調青崑』、明末書林四知館刻本。〔青〕

・阮祥宇編『樂府萬象新』、明末書林劉齡甫刻本。〔象〕

・闕名輯『大明天下春』、明末刻本。〔春〕

以上の選本を更に時代と傳播した地域とによって分かたつならば、明代前半期以降、吳地方に流傳した（吳本）（第一羣）から轉化した福建系脚本の（閩本）（該當選本無し）を分岐點とし、明代中期以降、南京に流傳した（京本）（第二羣）と、徽州に流傳した（徽本）（第三羣）とに兩極分解し、（徽本）は更に明末清初に江西弋陽を經由して福建、廣東、湖南、四川に流傳した（弋陽腔本）（第四羣）に變容したものとごくである（9）。

『合選』がこうした脚本分化の如何なる過程に位置づけられるのかを明らかにすべく、上掲の諸選本と對照すると次のようである。

卷一「琵琶記」「南浦囑別」は、父親に應試を逼られた蔡邕が妻の趙五娘と別れて旅立つ場面である。趙五娘が唱う【尾犯序】三曲目は、夫の一刻も早い歸郷を囑し、徒し心を抱かぬよう懇願する。この曲を収める十二種の選本では以下のような様相を呈する。

〔合〕(卷一「南浦囑別」)

【尾犯序】你儒衣纒換青、快着歸鞭、早辦回程、十里紅樓、休戀着娉婷、叮嚀、不念我芙蓉帳冷、也思親桑榆暮景、我頻囑付、知他記否、空自語惺惺、

儒衣を青衫に換へし後、歸りの鞭を速やかに、早に歸路に就かれよかし。十里の紅樓にて娉婷を戀したまふな。願はくは、我が芙蓉の帳の冷たきを念はずとも、老年の兩親の暮景を思はれよ。我頻りに囑付せしも、伊心に留めしや否や、空しく語ること惺惺たるのみ。

〔吳〕(利集「敍別」)

〔逸〕(雪卷「敍別」)

【尾犯序】儒衣纒換青、快着歸鞭、早辦回程、只怕十里紅樓、休重娶娉婷、叮嚀、不念我芙蓉帳冷、也思親桑榆暮景、親囑付、知他記否、空自語惺惺、

〔怡〕(弋陽雅調數集「分別」)

【尾犯序】儒衣纒換青、快着歸鞭、早辦回程、只怕十里紅樓、重娶娉婷、也須要叮嚀、叮嚀、不念我芙蓉帳冷、也思

親桑榆暮景、便是親囑付、知他記否、空自語惺惺、空自語惺惺、

〔籟〕(戲曲上卷「敍別」)

【尾犯序】儒衣纒換青、快着歸鞭、早辦回程、十里紅樓、休重娶娉婷、叮嚀、不念我芙蓉帳冷、也思親桑榆暮景、親囑付、知他記否、空自語惺惺、

〔珊〕(卷之三・忠集「囑別」)

【尾犯序】你儒衣纒換青、快着歸鞭、早辦回程、十里紅樓、休戀着娉婷、叮嚀、不念我芙蓉帳冷、也思親桑榆暮景、頻囑付、知他記否、空自語惺惺、

〔嬌〕(風集「送別南浦」)

【尾犯序】你儒衣纒換青、快着歸鞭、蚤辦回程、十里紅樓、休戀着娉婷、叮嚀、不念我芙蓉帳冷、也思親桑榆暮景、我頻囑付、知他記否、空自語惺惺、

〔菁〕(卷一・下層「伯喈長亭分別」)

【本序】儒衣纒換青、快着歸鞭、早辦回程、只怕十里紅樓、休得要重婚娉婷、叮嚀、不念我芙蓉帳冷、也思親桑榆暮景、親囑付、知他記否、我這裡言之諄諄、他那裡聽之漠漠、空自語惺惺、

〔簧〕(卷之上・下層「五娘長亭送別」)

【本序】儒衣纒換青、快着歸鞭、早辦回程、十里紅樓、休得要重婚娉婷、叮嚀、不念我芙蓉帳冷、也思親桑榆暮景、

親囑付、知他記否、俺這裡言之諄諄、他那里聽之漠漠、空自語惺惺、

〔摘〕(卷之一・下層「五娘長亭送別」)

【本序】儒衣纒換青、快着歸鞭、早辦回程、只怕你十里紅樓、休得要重婚娉婷、叮嚀、不念我芙蓉帳冷、也思親桑榆暮景、親祝付、知他記否、我這裡言之諄諄、他那里聽之漠漠、空自語惺惺、

〔明〕(卷之四・下層「蔡伯喈長亭分別」)

〔玉〕(卷之一・下層「伯喈長亭分別」)

【本序】儒衣纒換青、快着歸鞭、早辦回程、只怕你十里紅樓、休得要重婚娉婷、叮嚀、不念我芙蓉帳冷、也思親桑榆暮景、親囑付、知他記否、我這裡言之諄諄、他那里聽之漠漠、空自語惺惺、

〔青〕(卷之首・下層「長亭分別」)

【本序】儒衣纒換青、快着歸鞭、早辦回程、儒衣纒換青、快着歸鞭、早辦回程、十里紅樓、休得要重婚娉婷、無過只是叮嚀、叮嚀、不念奴家芙蓉帳冷、也思親桑榆暮景、就是高堂親囑付、知他記否、空自語惺惺、

【合選】の曲辭は京本系の『珊瑚集』『萬錦嬌麗』とは同様であるけれども、第四・五句目「十里紅樓、休戀着娉婷」なる婉曲な表現を、吳本、徽本、弋陽腔本系では「只怕十里

紅樓、休重娶〔妻〕娉婷」(十里の紅樓にて娉婷を娶られま

すな)、「只怕你十里紅樓、休得要重婚娉婷」(……娉婷を娶

らんとせられますな)などと直截に表わし、第九句目「頻囑付」もより親密な表現「親囑付」(懇ろに囑付す)に作って

いる。また徽本、弋陽腔本系では第十・十一句目の間に「我這裡言之諄諄、他那里聽之漠漠」(諄諄に訴えても、漠漠と聽き流すのみ)なる句が加えられている。因に『合選』同曲の眉欄校語に「戀着」、一作『重娶』、太露「頻」、一作『親伊』とあるのは吳本、徽本、弋陽腔本の諸本によく合致し、これらとは系統が異なることが明らかである。

また卷二「幽閨記」「途中邂逅」は、妹の瑞蓮と生別離した蔣世隆が王尙書の令嬢瑞蘭と出會う場面である。十種の選本に收められるこの場面冒頭で瑞蘭が唱う【金蓮子】曲には次のような異同を見いだすことができる。

〔合〕(卷一「途中邂逅」)

【金蓮子】古今愁、古今愁、誰似我目下這樣愁、聽軍馬驟、聽軍馬驟、人亂語稠、向深林中逃難、恐有人搜、

古今の愁、古今の愁、誰か我が現今のかかる愁ひに似ん。軍馬の驟せるを聽き、軍馬の驟せるを聽き、人入り亂れ言の葉稠し。深林に難を逃れるとも、恐らくは人の搜す有らん。

〔賽〕(卷三「曠野奇逢」)

〔玄〕(卷一「野逢」)

【金蓮子】古今愁、古今愁、誰似我目下這樣愁、聽軍馬驟、聽軍馬驟、人亂語稠、向深林中逃難、恐有人搜、

【菁】(卷之五・上層「世隆曠野奇逢」)

【金蓮子】古今愁、誰似我目下這般憂、聽得騷人鬧語、急向深林中避、只怕有人搜、

【摘】(卷之二・下層「世隆曠野奇逢」)

【金蓮子】古今愁、誰似我目下這樣憂、聽馬驟人鬧語、急向深林中避、只怕有人搜、

【詞】(卷之一・下層「蔣世隆曠野奇逢」)

【明】(卷之二・上層「曠野奇逢」)

【紅】(卷之十二・邂逅類「蔣世隆曠野遇王瑞蘭」)

【象】(卷二・上層「世隆曠野奇逢」)

【春】(卷之八・上層「世隆曠野奇逢」)

【金蓮子】古今愁、誰似我目下這般憂、聽馬驟人鬧語、急向深林中避、只怕有人搜、

【堯】(卷之下・下層「曠野奇逢」)

【金蓮子】古今愁、誰似我目下這般憂、聽馬驟人鬧語、急向深林中避、恐怕有人搜、

『合選』の曲辭は、京本系の『賽徵歌集』『玄雪譜』とは同様であるが、第六句目以降は、徵本、弋陽腔本系の諸本では「聽得騷人鬧語、急向深林中避、只怕有人搜」(人の鬧語さわぐを聞きつけて、急ぎ深林に難を逃れしも、恐らくは人の搜す

有らん)、「聽馬驟人鬧語、急向深林中避、只(恐)怕有人搜」(馬の驟せ人の鬧語を聞きつけて、…)なる口語的韻文短句に作っており、【金蓮子】曲本來の姿からすれば明らかに失韻である⁽¹⁰⁾。

卷三「玉簪記」「姑阻佳期」は、女貞觀に寄寓する潘必正が相思の女道士陳嬌蓮との約に赴く場面である。【月兒高】二曲目の女貞觀主の叔母が必正を見咎めて叱責する夾白には、五種の選本で次のような異同が見られる。

【合】(卷三「姑阻佳期」)

書到不讀、你到那裡閑走。

書物も讀もうとはせず、何處へそぞろ歩きに出掛けられませす。

【賽】(卷四「姑阻佳期」)

書到不讀、你到那裡閑走。

【詞】(卷之一・下層「潘必正姑阻佳期」)

你在那里閑走來。

【八】(卷之三・上層「姑阻佳期」)

【堯】(卷之上・下層「潘必正姑阻佳期」)

【菁】(卷之首・上層「姑阻佳期」)

你往那里閑遊走來。

『合選』の「書到不讀」は京本系の『賽徵歌集』にも見られ、讀書を怠ってまで逢引に出向く必正の禮教に悖る行動を

戒めるといふ言外の含みを有するけれども、徽本、弋陽腔本系の四本ではこの句は刪去されている(1)。

更に脚本の地域差による曲白の異同を注記する樂邁碩人増改定本『詞壇清玩琵琶記』、同『北』西廂記(天啓元年・一六二一刊)の校語によって『合選』の曲白を検すると、例えば『琵琶記』「送行囑別」(「合選」作「南浦囑別」)において、蔡邕と趙五娘が別離の悲哀を唱う【調金門】曲の眉欄には「京本・閩本『成拆散』、不若徽本『輕拆散』(容易に離別す)、閩本『難捨難拵』(離れ難く忍び難し)、京本云『難捨拵』、從古本也」と言い、『合選』の同曲は校語に示す京本の曲辭のごとく「骨肉一朝成拆散、可憐難捨拵(骨肉も一朝にして離別す、思ひが残り忍び難し)」と婉曲な表現に作っている。

また牛小姐と共にありながら蔡邕が趙五娘を思い遣る「弄絃寄悲」(同「琴訴荷池」)【桂枝香】曲には「京本作『舊絃已斷』(古き絃は最早斷てり)、『已』字太煞了、從徽本『欲字妙、危者、乃欲斷而未斷之絃也、從『危』字亦妙』と注記する。『合選』のこの曲は校語に言うごとく些か直截ではあるけれども、やはり京本同様に「舊絃已斷」に作っている。

『北西廂記』「錦字傳情」で鶯鶯への手紙の内容を張生から知らされた紅娘が唱う【後庭花】曲には、「閩本『忒三思』(思慮深く)、不通、今從京本」なる校語が附されて、實際

に曲辭は「你也忒聽明、忒煞思、忒風情、忒浪子(あなたは本當に聽明で、氣が利き、粹で、伊達なお方)」に作る。『合選』の同曲は語順こそ異なるものの「忒風流、忒煞思、忒聽明、忒浪子」とあり、京本に従ったと言う『詞壇清玩』本に同じく古雅な表現を採っている。

このように、『合選』の曲白は校語に言う閩本、もしくは閩本を洗練、純化して成立した京本の要件に合致し、吳本、浙本、徽本に同一のものは存在しない(12)。

以上のように、同時代の選本との對校、及び『詞壇清玩』本校語からすれば、『合選』が京本系に屬する選本であることは明らかである。上掲の例においても、『合選』は一部で古形である閩本の曲白を繼承しながらも、口語的要素を含まず、概ね婉曲かつ雅致に富む表現を採っていることはもとより、節度を保って禮教の枠組みからの逸脱を容認するような安直な措辭は忌避されており、「禮教主義、體制遵守の思想、典雅な表現」(13)という讀書人階層の好向を集約した京本系の戲曲選本の特徴をよく表わしている。こうしたことから『合選』は讀書人を受容者階層に据え、南京に流傳した選本であると推測できる。

四 『合選』の眉欄校語

『合選』眉欄には他本との異同、音注、語釋の他に、各散

齋の用字や構成に關する校語が施されている。

校異が該書の系統を知らしめてくれることは、前掲のごとくである。また校語の大部分を占める音注は、反切や平仄、難讀字に對する解説である。

語釋は次のように曲白の理解を深めるために施されている。

卷一『琵琶記』「琴訴荷池」【懶畫眉】三曲目の「藍田日暖玉生烟、似望帝春心托杜鵑、好姻緣翻爲惡姻緣、只怕眼底知音少、爭得鸞膠續斷絃」には、「古有杜宇治蜀、稱望帝、後死化爲杜鵑、二句李商隱『錦瑟』詩」とある。これはこの曲辭の前半が李商隱「錦瑟」詩の三句目以降の「……莊生曉夢迷蝴蝶、望帝春心托杜鵑、滄海月明珠有淚、藍田日暖玉生烟」なる四句を踏まえていることを指している。

卷四『題紅記』「溪口收春」の白「姐姐恭喜、不知是那個知音俊俏的人兒、下這箇玉鏡臺做聘定了」に「溫嶠定從姑劉氏女、以玉鏡臺爲聘」とあるのは、『世說新語』「假譎」篇の「溫嶠が劉聰から得た玉鏡臺を納徴として從姑劉氏の娘を娶った」という故事を踏まえていることを示唆している。

また用字、構成の問題について言及した校語は次のようである。

卷一『琵琶記』「臨粧感嘆」【破齊陣引】「翠減祥鸞羅幌、香銷寶鴨金爐、楚館雲閑、秦樓月冷、動是離人愁思、目斷天

涯雲山遠、親在高堂雪髻疎、緣何書也無」には「翠減」「香銷」「雲閑」「月冷」、于濃華中寫出冷淡意」とある。これは趙五娘が化粧をする場面にあつて「翠減」「香銷」「雲閑」「月冷」の語が蔡邕との別離の心情をよく描出していることを言うのである。

同じく「琴訴荷池」【梁州序】三、四曲目には、先ず「此二折前四句、與上體格稍殊。『新篁』折應『樓臺』二句、『薔薇』折應『一架』二句、『向晚』一折應『捲起』二句」とある。これは【梁州序】一曲目「新篁池閣」句が直前の【燒夜香】の「樓臺倒影入池塘」に、二曲目「薔薇簾箔」句が同じく「一架茶蘼滿院香」に、三曲目「向晚來雨過南軒」句がやはり同曲の「捲起簾兒」に呼應しているのに對して、同三、四曲目の冒頭四句の形式が一、二曲目とは別體であることを指摘したものである⁽¹⁴⁾。また「或疑月既上、又安得有棋聲、殊不知詞意通。一日言之、自不相妨」と言うのは、【燒夜香】末尾に「明月正上」とあるにもかかわらず、【梁州序】一曲目に「忽聽棋聲驚畫眠」とあるのが意味上の齟齬を來していることを言うのである。更に「四『眠』字、和得自然」と言ひ、【梁州序】全四曲の末尾が「忽聽棋聲驚畫眠」「我欲向南窓一醉眠」「深院黃昏懶去眠」「月照紗櫺人未眠」のごとく全て「眠」字で終わる妙を推賞している。

こうした校語はいずれも該書を読み、鑒賞する際のための

ものであることは言うまでもなく、異同、音注、語釋、そして用字、構成論共に讀者の理解を助けるためには充分である。すなわち、該書が讀曲に供された脚本であり、讀書人階層を受容者に据えたものであることを如實に物語っている。因に戯曲脚本に校語が施されたものは數多く存するけれども、同時期の戯曲選本には皆無である。また清重修部分には言うまでもなく校語は無い。

五 『合選』と『通行本』との關係

では『合選』は「通行本」¹⁵⁾と如何なる關係を有するの
か。

『合選』「通行本」共に同じ散齣が收められるものは、卷一「琵琶記」「伯喈慶壽」「蔡公逼試」「南浦囑別」「琴訴荷池」、『荆釵記』「十朋祭江」、『白兔記』「獵回詢父」、『尋親記』「逆旅逢親」、卷二「幽閨記」「兵火違離」「途中邂逅」「幽懷密訴」、『綵樓記』「破窑分袂」、『浣沙記』「范蠡遊春」「西施採蓮」、『連環記』「花亭賞春」「月下投機」「計就連環」、卷三「南西廂記」「佛殿奇逢」「遣婢請生」「臨期反約」、『玉簪記』「絃裡傳情」「姑阻佳期」、『綉襦記』「墮計銷魂」『襦護郎寒』「剔目勸學」、卷四「祝髮記」『達磨點化』、『紅梨記』「再訪」の十三種二十六齣である。この他は「通行本」に輯録されぬばかりか、卷一「北西廂記」『草廬記』『金釧

記』「四德記」『伍倫記』、卷二「四喜記」、卷三「玉玦記」『春蕪記』『玉環記』『金丸記』『紅葉記』、卷四「紅拂記」『玉合記』『綠綺記』『紫釵記』『題紅記』『灌園記』『投筆記』『竊符記』『青衫記』『還帶記』『明珠記』の二十二種三十八齣は戯曲自體が收められていない。

ここでは兩者の關係を明らかにすべく、普救寺に寄寓する張生が消遣のために境内の散策に出掛けた鶯鶯を見初める卷三「南西廂記」『佛殿奇逢』の【園林好】曲を例示したい。先ず『合選』では次のごとくである。

〔旦〕偶喜得片時稍閑、且和你尋芳自遣。那鸚鵡在籠中巧囀。

〔紅〕姐姐、前面有人來了。〔旦〕

暮聽得有人言、只索要自回還。

旦（鶯鶯）…嬉しいことに暫しの時間を得、そなたと花を愛でて憂き晴らし。かの籠の中なる鸚鵡は巧みに囀りをり。

紅（紅娘）…お嬢様、向こうから人が参ります。

旦…俄に人の聲を聞きつけて歸らんとす。

一方、「通行本」七編「遊殿」では次のように改められている。

〔旦〕偶喜得片時稍閑、

〔貼〕小姐、自古說「偷得浮生半日閑」。〔旦〕

且和你向花前自遣。

〔内作鸚哥叫介〕〔貼〕小姐、你聽那鸚哥叫得好聽吓。

〔旦〕

那鸚鵡在檐前巧囀。

〔小生、付上〕〔付〕張相公、幾里來。

〔小生〕請吓。〔旦〕

慕聽得有人言、須索要自廻還。

旦〔鶯鶯〕…嬉しいことに暫しの時間を得、

貼〔紅娘〕…お嬢様、昔から「浮世を逃れて半日暇」

と申しますわ。

旦…そなたと花を愛でて憂さ晴らし。

〔内で鸚哥の鳴く聲〕

貼…お嬢様、あの鸚哥の鳴き聲は素敵ですこと。

旦…かの檐先なる鸚鵡は巧みに囀りをり。

〔小生（張生）・付（小僧）登場〕

付…張旦那、こっちにお出でなされ。

小生…お先にどうぞ。

旦…俄に人の聲を聞きつけて歸らんとす。

ここに掲げた部分に限っても、「通行本」では新たな登場人物が加えられて白が冗長になると同時に、蘇白までもが加えられている。蘇白に關しては「通行本」の『琵琶記』『稱慶』（六編）・「逼試」（二編）・「分別」（八編）・「賞荷」（三編）、

『尋親記』『飯店』（初編）、『綵樓記』『潑粥』（四編）、『南西廂記』『跳牆』『着碁』（九編）、『綉襦記』『當巾』（十編）にも見えるが、言うまでもなく『合選』の同場面である『琵琶記』『伯喈慶壽』『蔡公逼試』『南浦囑別』『琴訴荷池』『尋親記』『逆旅逢親』『綵樓記』『破窖分袂』『南西廂記』『臨期反約』『綉襦記』『墮計銷魂』には混入されていない。この他、『合選』と同一の散齣のみならず「通行本」では概して曲辭の大幅な刪略や刪去、白の通俗化が見られ、また弋陽腔、梆子腔など地方劇の散齣も收められており、崑山腔の選本である『合選』に比べると明らかに俗尙に墮していると言えよう。

このように、『合選』と「通行本」との間では、輯録される散齣が一致せず、同一戯曲の同一場面でありながら大幅な出入が認められ、方言の混入、聲腔の種類においても差異が見られることは、両者が分化の過程を異にすることを意味している。また「通行本」は實際に觀劇や上演の用に供されており⁽¹⁶⁾、『合選』が讀曲用の脚本であるのとは明らかに別趣である。

六 結 語

以上に縷述したように、『合選』は南京に流傳した京本系に屬するものであることは明らかである。一方、「通行本」

は蘇白演出本の系統に位置する。これは脚本分化の過程において、「吳本系の通俗性を克服する方向」⁽¹⁷⁾で發展し、讀書人階層に供し得る内容に轉化した段階に屬するものか、「吳本系自體の内部で、通俗的な蘇白が増大して、演出の重點が曲文よりもむしろ蘇白に移」⁽¹⁸⁾り、庶民階層を對象とする内容に變容した選本かの差異である。このように、「合選」と「通行本」は、輯録される散齣の不一致、曲辭や白の大幅な異同、聲腔の多様化のごとき側面のみでなく、脚本分化においても全く異なる経路を辿っており、しかも對極に位置する受容者階層を對象としていることから、そもそも曲辭や白の直截の襲用關係を保ち得る要件に缺けている。さすれば、上掲の李克明や程大衡、李宸の序文に言う「通行本」編書の過程は、あるいは「綴白裘」が玩花主人の手に成る祖本から、典雅を旨とする『合選』と、通俗白を鏤めた「通行本」の二系統に分化したことを示唆するのではないか⁽¹⁹⁾。

ともあれ、『綴白裘』と銘打つ選本は上述のごとき多様な變容を遂げながらも、同じ名稱で行われ續けたのである。とりわけ、「通行本」とは系統を異にする『綴白裘』が明末においても行われていたという事實だけではなく、明末から清中葉に至る『綴白裘』の成書と演變の様相を明確に知らしめてくれるという點において、『合選』の存在意義は決して小さくない。すなわち『合選』は戲曲史上において閑却できな

い選本なのである。

注

- (1) 孫楷第氏「綴白裘合選四卷」(『戲曲小説書目解題』、人民文學出版社、一九九〇)、傅惜華氏『明代傳奇全目』「引用書籍解題」(人民文學出版社、一九五九)、周妙中氏「江南訪曲錄要」(『文史』第二輯、中華書局、一九六三)、同氏「綴白裘合選」(『清代戲曲史』第七章「曲選和曲譜」、中州古籍出版社、一九八七)、吳新雷氏「綴白裘」的來龍去脈」(『南京大學學報』一九八三年第三期)。

- (2) 林鋒雄氏「舶載書目所錄綴白裘全集釋義」(『中國戲劇史論稿』、國家出版社、一九九五。原載『天理大學學報』第一四〇輯、一九八三、に大幅な補訂を加えたもの)には、後掲『賽徵歌集』に時代が近いと推定する。

- (3) 馬廉藏書については大塚秀高氏「北京觀書記 その一—北京大學と馬氏書—」(『汲古』第七號、汲古書院、一九八五)に詳しい。

- (4) 陝西人民出版社、一九八七。該書の「清代版刻」の條には、李漁の「金陵翼聖堂」刊『四六初徵』十六卷(康熙十年刊)、及び「翼聖堂」刊「閑情偶寄」十八卷が著録される。

- (5) 全文は「白裘」一書、昉自醒齋、厥後至再三、至別至廣、何啻汗牛充棟、但購諸選而玩賞者、苦於篇帙浩煩、本坊敦請闕先生、博採歌林、詳訂數四、廣而復廣、集千腋以成裘、精益求精、和五鱗而作脰、誠曲譜之金聲、梨園之雅奏也、式唱三嘆、識者珍之」。

- (6) 全文は「山人選六十種之絶妙以成書、猶探千狐之腋以成裘者也、慨自屈平・宋玉始於哀怨之深、蘇武・李陵生於別離之代、蓋聲音之道、飄渺無端、比事屬詞、愷切入情、非感於牢騷之餘、即出於憂愁之際、昔都尉鴛鴦、纏綿巧幻、捷仔霜雪、發越清真、下此伶人曲度、才士傳奇、盛於元代、雖傳空谷之音、嘯性情之響、即□眞琵琶、亦不過一二劇、令人神怡、妙絕古今、餘劇聊聊、儘可抹煞、有明隆萬之間、西崖・若士・文長・中郎輩出、集東里・赤水之粹、逢時鬪采、鉤深曲引、描寫殆盡、忠臣・烈士・貞夫・遊女・英雄・豪傑、利鈍成敗之局、鬚髮婉肖、儼具於聲板、感其善心、懲其佚志、曲之爲技小、爲功大也、明矣、謂之畫工演化工可、有聲作無聲亦可、茲集輿會所及、因辭審義、因義審情、呻吟下里逸士之作多、歎詠金閨思婦之情切、鏡騎鼓吹、巷闔童謠、無非舒其蘊藉、導其悃愾、山人咀精華而吐糟粕、去陳腐而更新穎、彙以成書、橫槊所致、徘徊宇宙、上下千古、若同堂、若共夕笑語訕傲、名山大川、花鳥風月、有不能忍然者、非逃名於露電幻泡之說、正悚其向往仰企之心、展卷釋然、豈欲以芥子作須彌觀、正欲以一册當牙籤萬軸哉、是爲之跋」。
- (7) 明刻部分は卷一第三葉の、清重修部分は卷一第一葉の計測値による。
- (8) 本稿では『玉樹英』『樂府萬象新』『大明天下春』は李福清(B. Rittin)・李平兩氏編『海外孤本晚明戲劇選集三種』(上海古籍出版社、一九九三)所收の影印本を、『纏頭百練二集』『萬錦清音』は北京圖書館善本特藏部藏本を用いた他は、全て「善本戲曲叢刊」第一・二・四輯(臺灣學生書局、一九八四、一九八七)所收の影印本によった。尙、これらの選本の内容については、傅芸子氏「東京觀書記」「內閣文庫讀曲續記」(『白川集』、文求堂、一九四三)に詳述されている。
- (9) 田仲一成氏「十五・六世紀を中心とする江南地方劇の變質について」(五)、『東洋文化研究所紀要』第七十二册、一九七七、二七三～二七五頁。後、『琵琶記』のみ「中國祭祀演劇研究」、東京大學出版會、一九八一、に再録)の分類により、田仲氏によって引用されていない選本の分類は私見による。勿論、それぞれの戯曲の制作年代が異なるため、全ての脚本がここに掲げた分化の過程に對應するわけでは決していない。
- (10) 沈自晉『南詞新譜』卷十二「南呂過曲」にはこの曲が例示され、「古今愁、誰似我目下這樣憂、聽軍馬驟、人鬧語稠、向深林中躲避、只恐有人搜」に作っている。岩城秀夫氏「戯曲荆釵記はいかに改作されているか」(『中國戯曲演劇研究』、創文社、一九七三。原載「中國文學報」第六册、一九五七)にも指摘されるように、京本系以外の選本には曲辭の大幅な變改に起因する失韻が頻見する。
- (11) 本文中に例示し得なかつた京本系の『月露音』『樂府南音』『萬壑清音』『萬錦清音』の曲白は『合選』と合致するが、吳本系の『纏頭百練二集』、弋陽腔本系の『徽池雅調』とは異なっている。
- (12) 『詞壇清玩琵琶記』は東京大學文學部藏鈔本を、同『西廂記』は中華書局影印(一九六三)刊本を用いた。東京大學藏本の閱覽に際しては大木康氏のご好意を賜わった。これ以外

- で『詞壇清玩』本に京本と注記する曲辭と『合選』が合致するものには、『琵琶記』『蔡公逼試』『一翦梅』、『南浦囑別』『江兒水』、『鷓鴣天』、『琴訴荷池』『梁州序』、『中秋望月』『古輪臺』二曲目後半、『西廂記』『月下佳期』『油葫蘆』前半・【么】、『勝葫蘆』二曲目)がある。
- (13) 前掲注(9) 田仲氏論文二〇八頁。
- (14) 『南詞新譜』卷十二「南呂過曲」には【梁州序】一曲目を例示して、二曲目と共に【梁州新郎】と表示する。同じく後半二曲目は【梁州序】に作り、別體として取り扱っている。
- (15) 本稿では「武林鴻文堂梓行本」(『善本戲曲叢刊』第五輯所收)を用いた。
- (16) 梁章鋸『浪跡續談』卷六「文班武班」には「在京師日、有京官專嗜崑腔者。每觀劇、必攤『綴白裘』於几、以手按板拍節。羣目之爲專門名家、余最笑之。」「過雲閣曲譜」冒頭に附される同治九年(一八七〇)の過雲閣主人序には「後出『綴白裘』、白文俱全、善歌者羣奉爲指南、奈相沿至今」とある。
- (17) (18) 前掲注(9) 田仲氏論文二一〇頁。
- (19) 前掲注(1) 周氏、吳氏論文、及び前掲注(2) 林氏論文には慈水陳二球參訂、玩玉樓主人重輯『新刻較正點板崑腔雜劇綴白裘全集』(乾隆四年・一七三九、陳二球序刊本)、『綴白裘』(雍正二年・一七二四、陳二球序、友聚堂藏版)、楊仲芳校正『續綴白裘』(雍正間最樂堂梓)、洞庭簫士選輯、湖南主人校點『綴白裘三集』(雍正四年・享保十一年・一七二六の『船載書目』所掲)の存在も報告されている。

既刊案内

ACTA ASIATICA

No. 70 : Studies in the Poetry of Ancient and Medieval China

(古代中世中國詩研究 : 責任編集 興膳宏)

1996年3月刊 總108頁 定價4,000圓 (會員1割引)

Foreword by the Editor

KŌZEN Hiroshi, Views of Literature in Medieval China: From the Six Dynasties to the T'ang

MATSUURA Tomohisa, Rhythm in Chinese Classical Poetry: With a Focus on "Beat Rhythm" and "Silent Syllables" (Rhythm Vacuums)

KAMATANI Takeshi, The Early Bureau of Music (*Yüeh-fu*)

TOKURA Hidemi, Aspects of the Infinite: Observations on the Depiction of Landscape in the Poetry of the Six Dynasties and the T'ang

KAWAI Kōzō, The Transformation of Chinese Literature: From the High T'ang to the Mid-T'ang